

Title	知覚と合理性
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 10 P.1-P.13
Issue Date	1989
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6448
DOI	10.18910/6448
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八九年三月）
『年報人間科学』第十号 一頁―一三頁

知覚と合理性

菅野盾樹

知覚と合理性

人間は理性的動物である、と古人は言った。この定義にとくに異存はないが、人間以外の動物に理性はないのだろうか。そもそも理性とはどのようなかたちで始まるのだろうか。小論は、生体が何かをそれとして知覚する働きに注目する。知覚がすでに表現であり、記号であることを明らかにすることによって、「理性」が、ある意味で、人間にかぎらずあらゆる生体の運命であることを示したい。

1

ミドリヒョウモンという一種の蝶がいる。オスのミドリヒョウモンは、よく日のあたたかった林のへりなどに沿って飛びまわりながら、飛んでいるメスを探す。メスを見つけると、オスは交尾するためにただちに追いかけてゆく。ではオスは、どのようにしてメスを「見つける」のだろうか。オスがメスを同一指定する (identify) やり方は、動物学者の研究のおかげで詳しくわかつている。実はオスは、はばたくメスの翅の表面から発せられるオレンジ色と裏面の暗色とのフラッシュに誘引されるのだ。だから、同じ色紙を使ったモデルや、回転する円筒にも、オスは強力に惹きつけられてしまう⁽¹⁾。

蝶のオスはメスの「全部」を見ているわけではない。はばたくメスの翅が示す特有の色彩は、あくまでも、このメスという個体の

「一部」でしかない。それなのに、部分にすぎないある種の色が、交尾しようとしてメスを追いかけるオスにとっては、一匹の蝶にそのまま匹敵する。形而上学の用語で言い直せば、実体 (メス) がもつさまざまな属性のひとつ (ある種の色彩) が、ただちにこの実体と等値とされるのである。

ところで、伝統的な修辭学では、ある名が通常指すものと事実上の関係に置かれた別のものを、この名によって指す、という比喩を「換喩」(metonymy) と称する。たとえば、「王冠」という語で王様をあらわすことができる。というのも、王には王冠がつきものだからだ。こうした見地をここで導入しよう。すると、生体の知覚に關して見過ごせない大切な事実が浮かび上がってくる。すなわち、ミドリヒョウモンのオスがメスを認知する方式は、換喩的なのである。メスの翅の色彩とメスの個体が「事実上の関係」にあることはいうまでもない。前述のように、オスによって生きられた知覚には、一部を全部に匹敵させるという特有な論理が横たわっている。それは三段論法や計算を律するような形式論理ではない。比喩を支援しているこの種の論理を、しばらく「表現の論理」と呼ぼう。知覚が換喩的な構成をそなえているかぎりにおいて、知覚はすでに「表現」

(representation) である。

知覚は、刺激なり感覚印象なりをただ受動的に受け入れたたり、記録する動きでは決してない。事物から発する光にフィルムが感光して、そこに事物の形をとどめる、という受動的なモデルでは、知覚を捉えることはできない。ある解釈や理論を取り込んでいない、いわばまったく手ぶらの純粹な知覚などがないことは、多くの人が指摘しているとおりである。たとえば N・R・ハンソンは、感覚を解釈によって加工することによって知覚が作られる、とする説(知覚の二段階構成説)をきっぱりと否定している。「見る」ことはすでに「とじて見る」ことなのだ。ハンソンは、兩義的な図をもちだす。

それは、ある人には兎に見え、別の人にはアヒルに見える、という図である。しかし、はじめに兎でもなくアヒルでもない中立的な感覚刺激が与えられ、ついで、それがある人は兎として解釈し、別の人はアヒルとして解釈する、というのは誤りである。「解釈する」とは(ワイトゲンシュタインが言ったように)何かをすること、活動(activity)であるが、「見る」とはそうではない。この兩義的な図を前にして、人はその都度別々のものを見ているにすぎない。強いてここで「解釈」という要素をいいたいなら、それははじめから見ることの成分となっており、見ることに並列するわけではない⁽²⁾。

見るとは、見えるものよりつねに余計に見てしまうことである。

この知覚の本性には、ある能動的な要素が示されている。一部が全部に匹敵するという表現の論理こそ、知覚のこの能動性の現れには

かならない。また、ここには、知覚が存在にかかわると同時に、いまだないもの、もはやないもの、あるいはありえないものへさえかかわる、という性状が見てとれるだろう。換言すれば、知覚は非存在、ないし無を巻き添えにするのだ。しかし当面は、知覚に溶け込んだ解釈ないし意味の修辭的身分が換喩にはかならない点を、ふたたび強調しておこう。知覚はすでに表現であり、ある種の記号の形態なのである⁽³⁾。

2

蝶のオスがメスを見つける際、余分に知覚するというかたちでしかメスを同一指定できないということは、知覚の表現性をあらわすと同時に、知覚がきわめて実践的・行動的な性格をもつことをも示している。知覚がまったく思弁的な関心にみちびかれた、純粹な認識である、という見方はど事実から遠いものはない。この点はおつてベルクソンが強調したとおりである。生体の知覚は、この生体がなしうる可能な行動を影のように描きだす。知覚はいわばすでに始まりつつある行動なのだ⁽⁴⁾。

抜かりのない昆虫学者よろしく、メスの属性をしらみつぶしに調べ上げるなどということをしていたら、オスはいつになっても交尾の目的を遂げることができないだろう。そもそも、ウアイズマンのいうように、経験的事物を属性を枚挙することによって完璧に定義するのは不可能である⁽⁵⁾。ある対象が、メスに特有な翅の色とさらにメス独特な匂いをもつ、としよう。それでも、この対象が目当てのメスであるとはかぎらない。それは、昆虫学者が作ったモデルか

もしれないからだ。かりに本物のメスを完璧に判定するために、できるかぎり精密に n 個の判定基準を揃えることができた、としよう。それでもこの対象がメスである、とは断定できない。なぜなら、 $n+1$ 番目に見出される対象の特性や振る舞いが、この対象がメスであることと撞着するかもしれないから。原理的には、対象の完璧な同一指定は不可能である。にもかかわらず、事実上、オスはメスを認知することにまずたいいてい成功するし、われわれがおこなう知覚による事物の同一指定もたいいていは首尾を遂げる。もちろんオスとはきたまへまをするだろう。色紙で作った偽のメスに惹きつけられたオスは、目的を遂げることができない。それでも、ある特有な色彩の交錯を捉えたオスは、環境に格別な異変が生じないかぎり、相当高い確率でゴールまでゆきつくことができるだろう（もしそうでなければ、この蝶はとくに絶滅していたにちがいない）。いってみれば、最小の出費で最大の財を手に入れることが、知覚の経済学の眼目である。出費とは認知のために生体が費やす努力やエネルギーであり、財とは、秩序だった事物の連関（あるいは生物にとっての環境、もしくは人間にとっての世界）にはかならない。

しかしながら、この成功には「論理的な」保証など一切ないことにくれぐれも留意しなければならない。メスの同一指定から交尾にいたる過程には、必然的な論理の支えがない。オスがしばしばへまをやったり騙されたりすることが、その何よりの証拠である。ここで問題にすべきは論理ではなくて、むしろ雌雄の蝶の集団によっておこなわれる実践である。言い換えれば、彼らが共同で自分たちの

住むべき世界を知覚し行動しながら制作することが問題なのである。この制作にたずさわる蝶の知覚はすでに行動へと延長されている。事物を知覚することは、事物を分類し、事物相互の関連をたどり、全体として事物を編成し、そのようにして世界を制作することにはかならないのだ。

3

事物（これには、生物と無生物の両方を含める）の知覚をいっそう具体的に捉えるためには、ここであらためて時間という次元にそくした知覚的総合に注目しなくてはならない。何かをしかじかの事物として同一指定することは、この事物の時間的展開に多少なりとも先回りすることをともなっている。言い換えれば、それがこの先どのように振る舞うか、あるいはどんな特性を示すかについての予期なしには、いまここでこの事物を知覚することはできない。

たとえば、その泡だちといい、匂いといい、色あいといいビールの液体を飲めば、それはさだめしビールの味がして（特性）、喉のなかへと流れこんでゆく（振る舞い）だろう。コップの液をビールとして見ることは、そうした予期をともなう。ところが、いざそれを口にもうとしたら、味も何もない固形物が私の歯に触れたとしたらどうだろう。私はひどく驚くに違いない。知覚に含まれた予期は必ずしも明確なものではないし、それをことばで語りうるともかぎらない。しかし、いずれにせよ、時間によって展開された事物の振る舞いや特性がこの予期を裏切ったために、この驚きが生まれた

のだ。

ある瞬間における事物の姿は、ヒュームに代表される経験主義者にいわせれば、別の瞬間におけるその姿と論理的に独立である。逆に言うと、このふたつの姿は必然的に結合されてはいない。それゆえ、たとえばある時点で机の姿をしたものが、次の瞬間に生きた象に変容することだって、論理的に言えば十分にありうる話しなのである。しかし、実際には、経験主義のこの原理を一定のやり方で限定することによって、われわれの具体的な知覚が成立をみる。こうして、机が象に転身するといった、あまりに過激で奇矯な事物の振る舞い（古人はこれを「実体的変化」と呼んだ）は、机の享有しうる可能性からは通常排除されるのである。

知覚に組み込まれたこの方式は、実はすでに述べた、知覚の換喩的な成り立ちと同じである。いままでに知覚が捉えた事物の性状や行動は、問題の事物の可能性の全部ではない。しかし知覚は、この一部にすぎないものに、これから先に展開されるはずの性状や行動までも含めた全部をただちに見てしまう。知覚的総合を導くのは、またしても部分が全体に匹敵するという表現の論理、ないし換喩の論理にはかならない。ふたたびここで、知覚が記号の形態であり、すでに表現であることを確認できるだろう。しかも、今回は、問題はたんなる換喩にはとどまらない。換喩的論理を基礎としながら、いまや知覚は、雷が雨の、煙が火事の徴候であるように、ある意味で徴候（symptom）となる。雷鳴を聞いた者が、雨が降りだしそうだという予期をかきたてられるように、事物の知覚は、それを受

け入れた者にある種の予期を抱かせ、事物の差し迫った振る舞いに対処するための行動を準備させるのだ。

4

知覚は、ある意味で、徴候という名の記号である。

この観察に関連して、いくつかのことを指摘しておきたい。われわれの知るかぎり、徴候に関してはこれまで周到な記号論的分析が不足していたように思われる。ある記号論の辞典によれば、「徴候」という記号の要点は、原因と結果の自然な関係を表わす記号である、ということにある。この記号が意図的に生みだされたかどうかは別問題であって、徴候の要件は、その記号作用が記号とその対象との事実上の関係に基づくことだ、という。この意味で、徴候はパースのいうインデックス（Index）の一種にはかならない。

なるほど、赤い発疹が麻疹の徴候である、ということが成り立つためには、発疹と麻疹とが自然の紐帯によって結びつけられていないなくてはならない。発疹は麻疹という病因の一つの結果なのである。同じように、雷鳴と降雨という二つの出来事は、それぞれある自然現象の要素をなしている。しかし、これはあくまでも徴候の必要條件にすぎない。二つの出来事が自然によって結合されるとしても、一方が他方の徴候になるとはかぎらないのだ。たとえば、どこから見てもまるで麻疹の徴候のような発疹が、実は麻疹とはまったく別の、未知の病気を示唆する症状にすぎない、ということがありうるだろう。もちろんこの場合も、発疹とこの未知の病気は、自然のうちでやはり結合されている。にもかかわらず、問題の発疹は、仮定

により、ある確定した病気の徴候ではありえない。そのような病気については、医学的な究明が何ひとつされていらないからである。

見落としてはならないのは、徴候が機能するには、徴候が記号の一形態であるかぎり、慣例 (convention) の仲立ちを必要とする、ということである。したがって、ある出来事が別の出来事の徴候を構成するには、これらの出来事に関して経験が積まれ、知識が獲得されなくてはならない。雷鳴の場合でもそうである。いつとは知れぬ大昔から、雷鳴が轟くとはばらくして雨が降りだす、という数知れない経験を人々はしてきた。もしこの経験がなければ、雷鳴を降雨の徴候として知覚することは決してできない。徴候が機能するのに必要な慣例の基礎をなすのは、こうした経験知にはかならない。逆に言って、もしこの知識の内容が変われば、徴候の意味はそれに応じて変わるにちがいない。こうして、徴候はなれば自然に根を下ろしているが、しかし自然から直接生まれた記号ではない。ここにも言語慣例が介入する。徴候も、ソシュール流に言えば、やはり恣意的 (arbitraire) な記号にすぎないのだ。

無生物や自然現象はしばらくおいて、生物が発信する徴候にも目を向けてみよう。仕草や表情や発声は、一面で、一定の情動を表現する記号である。たとえば、つながれた犬が鎖もちぎれかねないほど猛りたつて吠えている、とする。犬の身振りや吠え声は、ある種の怒り (いや、もしかすると、それは激しい喜びかもしれない) を実際にやって見せている、ということだ。他面で、この表現は、もし鎖を解かれればこの犬が跳びかかってくるだろう、という予期を

誘発するかぎり、徴候という名の記号である。これまでの例 (ピールの紛い物、雷など) とは異なり、徴候の発信者は生物である (ただし、犬はそれを意図して発信しているのではないが)。だが、知覚において立ち現れる事物が非存在を巻き添えにしているという、知覚の独特な構成に関しては、事情はまったく変わらない。仕草や表情を見るとき、われわれは見えないものさえ見ってしまうのである。仕草や表情がほかの記号の形態と異なるのは、そこに認められる記号作用が「示し」の一種だ、という点である。ある生地の見本がじかに生地の色や柄や風合いなどを示すように、彼の表情、それが彼の悲しみである。もし「原因」という語が、ある出来事につねに先立つ別の出来事を意味するならば、悲しみは表情の「原因」などではない。かくかくの表情としかじかの情動とは、時間によって隔てられてはいないし、外的な関係で結ばれてもいないからである。

記号としての仕草や表情にも、りっぱに慣例が介入する。ある人が眉をひそめ涙をながすという仕草は、必ずしも悲しみの表出とはかぎらない。それは怒りかもしれない。いや、それが悲しみだとしても、憂いの悲しみなのか、喪失の悲しみなのか、悲しみの状態にはほとんど無数の違いがある。仕草や表情のそなえた属性や関係のどれが有意性をもち、どれが有意性を欠いているかを決めるのは慣例である。しかし、この慣例はしばしばあまりにも微妙で複雑をきわめている。それを簡略な知識の項目にまとめ、情動のコードをあらかじめ作るなど不可能だろう。われわれが人の気持ちをたびたび誤解したり気づかなかつたりしがちなのは、一つにはそのため

である。

仕草や表情の知覚が慣例なしには成立しがたいことを、見本 (exemplar) を例えとして説明しておこう。たとえば、同じ色だが素材の異なる二種類の生地の見本があるとす。一方で、それらは異なる素材の見本である。しかし他方で、二つはともにある同じ色の見本なのだ。しかし、そもそもそれらは「生地の見本」ではないのかもしれない。事と次第によつては、ある図形や面積を例示するためにこれらの生地見本を使用することさえできるだろう。ある見本が「何の見本か」、「何を」示しているのか、これを限定するのは記号にかかわる慣例にはかならない。同様に、ある表情が「何を」意味しているかは、表情のいわば素材、すなわち身体の解剖学的組織やその状態だけからは決して分らない。たとえば、「日本人は怒ると微笑するが、西洋人は赤くなつて足を踏み鳴らしたり、あるいは色蒼ざめて口角泡を飛ばす」ではないか。重要なのは、彼らが自分の身体をどう使用するかという、その使用の仕方」なのであり、われわれの言い方だと、身体の使用にかかわる慣例なのだ。したがつて、慣例に無関係に機能する「自然的記号」(signes naturels)などは、そもそも人間にとつては存在しないといふべきだろう。

5

合理性とは何だろうか。この問いに一口で答えるのはとてもむずかしい。しかし、知覚に関してこれまでおこなつてきた観察は、問題に多くの光を投じてくれるように思われる。初めの問いをもう一

度立て直して、こう問いたい。知覚と合理性は、どのように結びつくのだろうか、と。

合理性という概念に関して、精緻で網羅的な考察をここでおこなうゆとりはない。だがとりあえず、ことばの用法を少々観察して糸口をさぐつてみよう。哲学用語の多くがそうであるように、「合理性」という語も翻訳によつて日本語に加えられた。英語では rationality。辞書によれば、ラテン語の *rationalitas* にさかのぼり、「道理にかなつた」とか「筋のとつた」を意味する *reasonable* という形容詞から派生した語だといふ。この形容詞はもちろん名詞の *reason* (ラテン語 *ratio*) と縁の深いことばである。この名詞にはさまざまの意味があるが、当面の課題との関連では、なかでも「理由」、「根拠」、「理性」などの意味に注目すべきだろう。

弾性がたとえばゴムの物理的性状であるとしたら、合理性はいつたい何の性状なのか。この問題を考えるには、抽象名詞をいったん形容詞に差し戻して観察するほうが近道だろう。つまり、「合理的な」といふ語が何を修飾するかを調べればよい。日本語では「合理的な仮説」ともいふし、「合理的な行為」ともいふ。ところが英語では、前者を *reasonable hypothesis* とはつても、*reasonable (rational) hypothesis* とはつてはつた。後者は、*reasonable (rational) act* もある。(そのうえ、*reasonable* という形容詞も *decision, reply* などを修飾するのが主要な役目らしい。つまりやはり行為を飾ることばなのである。)

辞書をたよりに整理をすると、次のように言えそうである。仮説

は正しかったり、精密だったり、真だったりする。しかし、仮説、命題、説明そのもの(言語のある形式)——それぞれが「理性」の所産であり、「根拠」をもつ——が「合理的」なのではない。合理的なのは、そうした仮説を信じる態度であり、命題を口にする人物であり、説明をおこなう行為なのである¹⁰。このへんで言語の観察はきりあげてもよさそうだ。そこから引き出されるささやかな結論は、こうである。合理的であることができるのは、第一にある種の行為や態度であり、第二に、そうした行為や態度に身をゆだねる人物である(後者の用法はしばらく考慮の外に置きたい。前者から簡単にそれを導けるからである)。

この結果はあらたに問題をひきよせる。ある行為や態度が「合理的」なのは、どのような意味でなのか。この点に関して、ブラックの提唱する「基本的な理由の使用」(basic reason using)という考え方は多くの示唆にとむ¹¹。例に則してその内容を説明したい。

たとえば、色といひその泡立ちといひビール以外の何物でもないものが注がれたコップを知覚した私は、それを飲むうとしてコップについて手をのばす。知覚はすでに始まりつつある行動である。知覚はそのままのさの行動へと結合している。なぜ私はコップへ手をのばしたのか。もちろんこのとっさの間に、形式の整った推論をおこなう余裕はまったくない。私の脳裏を駆けてゆくのは、ごく省略のきいた思考にすぎない。強いて文のかたちで書くならば、「あ、ビールだ、喉を潤したい、コップをとれ」という具合になるかもしれない。もしこの瞬間の思考を補足して後から表現すれば、一種の

省略三段論法が得られるだろう。「私は一杯のビールが目の前に差し出されたのを見た。もしそれを飲めば喉を潤すことができるだろう、と私は思った。それゆえ、ビールのコップを取り上げて飲むとした。」ここには私のとった行動の「理由」が語られている。しかし、ブラックによれば、瞬間的な、ほとんど自動的な反応(たとえば、ピンで指を刺し反射的に手を引っ込める、というような)にも、この三段論法に認められるような「理由」の使用が含まれている。それが「基本的」と呼ばれたのは、一つにはそれがこの種のごく単純な行動にすでに含まれているからであるが、また他方では、それが高度に発達した知性や技能の基礎をなすからでもある。

まだ味わってもいけないビールの味覚を巻き添えにするかぎりでは、この視覚像は換喩であり、味覚にかかわる予期のみならず、コップをつかもうとする行為さえ誘発する点で、徴候という記号の形態である。私の知覚が徴候として機能するということは、ある出来事が差し迫っていることを、この知覚そのものにおいて私がすでに知っているということにはかならない。出来事は知覚する本人にとって益をなすかもしれないし、害になるかもしれない。ビールで喉の渇きをいやすことは有益なことだ。しかし、差し迫った出来事の知覚あるいは予期されるがまだ生じていないものの表象(その都度の知覚はまず必ずそうした成分を含む)は、必ずしも現実化されない。ビールだと見たものが、実はビールに似せた模型にすぎないかもしれないのだ。

「基本的な理由の使用」という概念に訴えれば、先程の問い——

行為や態度が「合理的だ」というのはどのような意味なのか——にひとまずこう答えることができる。「基本的な理由の使用」を圧縮されたかたちで内に含んだ行為や態度こそが、「合理的」である可能性をもつ。どんな意味でも「理由の使用」を内含しない行動（たとえば、寒気のせいできこったくしゃみ）に対しては、理由を問うことはまったく無益である（その「原因」を問うことには意味があるが）。ある行為がなぜおこなわれたのか、その理由を問うためには、この行為のうちで、またこの行為のかたちで、「基本的な理由の使用」がなされなくてはならない。こうして、なぜそのような行為をしたのか、なぜそうした態度をとったのか、その「理由」を問うことが可能であるかぎり、行為や態度を「合理的」と形容する余地が生まれるのだ。

とはいえ、ここで問題にしているのは、行為ないし態度の合理性の「基準」ではないことを注意したい。ある行為を合理的と判定するためには、いくつもの基準をそろえる必要がある。たとえば、その行為をする十分な理由がある事実は、それが合理的である基準の一つである。あるいは、それが目的になまっていることも、基準に数えられてよいだろう。しかし基準を枚挙する以前に、行為がそもそも「合理的」でありうる根拠がいまは問題なのである。

6

ブラックはこの考え方を人間以外の動物に拡張している。たとえば、主人がミルクを皿に注いでいるのを認めた猫が、皿のほうへやってくるとする。その猫が飼い主の身振りに関して抱いた知覚は、予

期されるがまだ現実化していないものの徴候にはかならない。知覚は記号であり、すでに行動へ延長されている。つまりこの知覚は、ミルクを飲むという可能的行動を影のように描きだすと同時に、いち速く身を起こし脚を踏みだす、といった現実的行動と切れ目なくつながっている。この知覚⇨行動を、擬人化を恐れずときほぐして描写すれば、次のようになるかもしれない。「あ、御主人がミルクを皿に注いでいる、空腹でたまらない、だから、さあ皿のところへゆけ」と。猫の知覚（そこからすでに行動が芽吹いている）には、「基本的な理由の使用」が含まれている。だからこそわれわれは、なぜ猫はミルク皿のほうへやってきたのか、と問えるのだ。ミルクにありつくために、とわれわれは言う。このように、動物においても人間の場合によく似た合理性、正確には「準合理性」(quasi-rationality)を認めることができるのである。

動物における合理性を論じるに際して、ブラックは慎重にことばを選んでいく。予期とか記号としての知覚などに言及したからといって決して動物を擬人化するつもりはない、という。動物は理由や記号の概念をもっていないし、人間が組み立てるような推論——それがどんなに断片的であれ——を作れないだろう。それにもかかわらず、人間における基本的な理由の使用と動物の準合理性の行使とは共通な質をそなえている。動物の行動が人間のそれに似るかぎり、動物がある程度人間化するとすれば、ある技能（たとえば楽器の巧みな演奏）に習熟した人間は、ある意味では動物になるのである。しかしブラックのいう動物 (Beasts) は、たんに熊、猫などに限

られている。では、われわれのミドリヒョウモンの行動には、合理性がまったく欠けているとでもいうのだろうか。われわれは議論の冒頭で、進化の系統のうえで哺乳動物に較べればずっと遅れている昆虫を例にあげた。ブラックの設けた制限を撤廃して、知覚と合理性の関係について再考したからである。オスの蝶がひらひらする翅の色彩を知覚して、メスを追いかけるという行動は、明らかに「合理的」ではないだろうか、なぜオスはこうした行動をするのか、と問えるからであり、行為の理由が用いられているからである。もちろん、この問いを提出しているのはわれわれである。蝶はどんな意味でも推論をしているわけではないだろうし、断片的なイメージすらもちえないだろう。また蝶は、人間のもつような「理由」の概念をもたないだろう。これらはみな明らかなことである。

擬人化を避けながら、しかも「基本的な理由の使用」という見地を生かすには、言語中心主義と手を切る必要がある。人間にとつての言語の重要性は多くの人が語っている。人間精神は人間の言語そのものだとさえいってよいかもしれない。しかし、これはやはり事実の誇張なのだ。われわれ人間は、意思を疎通し、相互に行為しあい、世界を描写するに際しては、たんに言語だけではなく、それ以外のあらゆる記号（それには身振りや表情といった身体的表出をはじめ、絵画のあらゆる形態、音楽のあらゆる形態、などが含まれる）を多様に使用している。言語は記号の一つであるが、記号は言語ではない¹⁵。なるほど動物（犬も蝶も含めて）は、いやあらゆる生体は、人間のように言語をもたないかもしれない。だが、彼らはそれ

それに固有な記号系をもっている。生体のもちうる知覚は、言語的記号の形態ではないにせよ、なんらかの記号の形態であることには変わりがない。もしわれわれの観察が正しいなら、人間のみならず他の生体の知覚も換喩的構成をそなえ、徴候として機能するからである。

人間言語を解する者だけが、文字通りの意味で「理由」なる概念を形成できる。山道を登っていたとき、岩がころがり落ちてくるのを知覚してとっさに道の傍らに跳び退いて難を避けた人に、なぜそうした行動をとったのか、と訊ねてみよう、その相手は、「そうしなければ岩にぶつかって大怪我をしたかもしれないし、生命を失ったかもしれないからだ」と自分の行動の「理由」をあげるだろう。

これに反して、翅の色彩によってメスをそれと認めたオスが「理由」なる概念をもっていないことはいまさら言うまでもない。蝶はそもそも言語を話さないからである。しかし、もし生体の知覚が記号の形態なら、類比的な意味で、蝶も行動の「理由」を使用すると見なすことができる。「概念」なる概念は多義的でもあり曖昧でもあって、一義的で明確な定義をわれわれは知らない。だがもしそれが、思考の要素、とくに名詞に対応する要素を意味するなら、蝶も類比的な意味で「概念」をもつといっておかしくはない。というのは、そもそも思考とは言語の類比概念であり、記号系をもちうるものは、なんらかの意味で「思考」を営むことができるからである¹⁶。

7

かつてモンテーニュは、動物さえ理性を用いて推理をおこなうと

して、こう説いた。トラキアの住民は、水の張った河を渡ろうとするとき、案内役として狐を使うという。狐は水際にゆき水に耳を寄せ、流れる水の音に耳をすます。まるで、狐は自分の自然な感覚を用いてこう推理しているようではないか。「音をたてるものは動いている。動いているものは固まっていない。固まっていないものは流動体である。流動体は重さに堪えない」と。それをただ聴覚が鋭いからであるとし、理性と推理をそこに認めないのは空想であって、私たちはそうした憶測を認めるわけにはゆかない、というのだ⁽¹⁾。

正統的なキリスト教神学のように、人間にだけ他のあらゆる生物とは異なる特別な地位を与え、人間の「理性」を絶対視する考え方に、モンテーニュはここで明確に反対している。狐の行動に関するこの記述を、素朴な擬人化として笑ってすますことはもはやできない。狐が言語を解さず、概念を使って推理することができないのは自明だろう。しかしモンテーニュは慎重にことばを選んでゐる。狐の様子は、まるで人間が推理しているかのようだ、というのだ。狐がやって見せるのは、推理の擬態にすぎない。にもかかわらず、この擬態は、人間理性とは異なるある種の「理性」に導かれている。狐の「理性」とはその「自然な感覚」である。こうして、随想録の著者は、理性の様態が決して一通りではない、と主張する。なんらかの記号のあるところ、そこはすでに理性が働きを始めている場所だからである。

とすると、準合理性を、ブラックのように、哺乳類のような高度に進化した生物にしか認めない見地には、十分な理由がないことに

なる。ミドリヒョウモンの行動も合理的でありうる。これはたんなる擬人観ではない。蝶という生体の生命の論理に即して、その知覚と行動は合理的なのであり、蝶は蝶の流儀で「理由」を使用し、ある意味でりっぱに「理性」をもつのである。蝶のオスがメスを認知するといった原始的な知覚にも、すでに理性がやどっている。

知覚の記号的構成と合理性とは、同じ深みに根ざしているのだ。

【注】

(1) 日高敏隆、一九七七、五四頁以下。詳しく言うと、オスが交尾にこぎつけるまでにはまだいくつもの関門がある。オスの求愛行動にメスが応えてくれなくてはならないし、メスが発散する匂いをオスがキャッチすることも必要である。しかし、こうした細部を考慮しなくとも、われわれの論点は成り立つだろう。

(2) ハンソン、一九八二、第二部、参照。セラーズはあらゆる概念図式から独立な「所与」の神話を批判している。また、現象学者メルロ＝ポンティにとっては、知覚の所与はいつでもある意味に浸透された、地のうえの図にはかならない。

(3) 伝統的修辭学では、換喩を提喩(synecdoche)から区別しているが、ここではこの区別に拘泥していない。また、ここでなされた観察は蝶といった「思考」をいとなまない生体の知覚だけではなく、われわれ人間の知覚にもそのままあてはまる。以上の点については、菅野盾樹、一九八三、二七八頁～二八二頁、を参照。

(4) ヘルクソンのこの思想については、たとえば、Bergeon, H., 1939, pp. 16-17, p. 24, p. 35 et passimを参照。

(5) Waismann, F., 1951を参照。

(6) グッドマンの「世界制作」(worldmaking)という概念が重視されるべきだろう。知覚は帰納法、因果性などの問題にも深くかわるが、ここでは立ち入る余裕がない。問題を考える上で、グッドマンの業績のうち、少なくとも邦訳のある二著(一九八七a、一九八七b)

の参照は不可欠である。因果性については、菅野盾樹、一九八七、を参照。

(7) 詳しくは、菅野盾樹、一九八三、第八章を参照。

(8) 知覚が徴候である、という定式は奇妙な印象を与えるかもしれない。物理的な音響としての雷は客観的な出来事であり、雷の音の知覚は主観的な状態ではないだろうか。そして、徴候の資格をもつのは、知覚ではなく知覚の対象、事物そのものではないか。この疑いはある種の二元論に立脚している。知覚の対象(事物そのもの)と知覚に映じたその姿(知覚像)を区別する二元論である。問題は微妙であり、この場で詳しく検討する余裕はない。結論だけを述べておけば、こうした単純でダイナミズムに欠けた二元論は誤りである。

(9) Rey-Debove, J., 1979, pp.142-3.

(10) Merleau-Ponty, 1945, p. 220. (邦訳、三〇九頁)

(11) *ibid.*

(12) Black は a reasonable N という名詞句を作りうる N として、人物、ある種の行為(すくなくとも行為ではない)、あるいは態度や感情をおく、詳しく検討をしよう。Black, M., 1983b.

(13) Black, M., 1983a, pp.30-31.

(14) *ibid.*, p.33.

(15) グッドマンは「言語以外の記号系に対して言語学者を言田にする」職業的近視を克服しなければならぬ、と戒めている。(ちなみに「こころ」「言語学者」と目されたのは、チョムスキーである。) Goodman, N., 1969を参照。またトラスはセラーズを相手に、同様の批判をおこなっている。Marras, A., 1978を参照。

(16) 思考が言語の類比概念であるという見地については、次を参照。菅野盾樹、一九八六。

(17) モンテーニユ、一九五八、六二四頁。

【引用文献】

Bergson, H., 1939, *Matière et Mémoire*, Paris: PUF. (『物質と記憶』)

(田島節夫訳)『白水社』一九六五。

Black, M., 1983a, "Why Should I Be Rational?" in *The Prevalence of Humbug and Other Essays*, Ithaca and London: Cornell University Press.

———, 1983b, 'Reasonableness' in *The Prevalence of Humbug and Other Essays*, Ithaca and London: Cornell University Press.

Goodman, N., 1969, 'The Emperor's New Ideas' in Hook, S.(ed.), *Language and Philosophy*, New York: New York Uni. Press.

グッドマン、一九八七a、『事実・虚構・予言』(兩宮民雄訳)『勁草書房』

———、一九八七b、『世界制作の方法』(菅野・中村訳)『みすず書房』

ハンソン、一九八二、『知覚と発見(上)』(野家・渡辺訳)『紀伊國屋書店』(Hanson, N.R., *Perception and Discovery*, Freeman, Cooper & Company, 1969.)

日高敏隆、一九七七、『動物によって社会をなごかす』講談社学術文庫。

Marras, A., 1978, 'Rules, Meaning and Behavior' in Pitt, J.C. (ed.), *The Philosophy of Wilfred Sellars*, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard. (メロ＝ポンティ『知覚の現象学』(竹内・小木訳)一九六七『みすず書房』)

モンテーニユ、一九五八、『モンテーニユ随想録』(関根秀雄訳)『白水社』

Rey-Debove, J., 1979, *Sémiotique*, Paris: PUF.

菅野盾樹、一九八三、『我、ものを遭ふ』、新曜社。

———、一九八六、『指向性——意味の意味』大阪大学人間科学部『年報人間科学』第七号。

———、一九八七、『ものと因果性』『季刊nichiko』第三号。
Waismann, F., 1951, 'Verifiability' in Flew, A.G.N.(ed.), *Logic and Language*, First Series, Oxford: Basil Blackwell.